27

世界文学全集

魔の山〈2〉

トーマス・マン／高橋義孝訳

世界文学全集　27

魔の山　II

トーマス・マン

訳者　高橋義孝

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社　製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

魔の山

(Ⅱ)

Der Zauberberg

by

Thomas Mann

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第六章

変っていくこと

時間とは何か。一個の秘密である――実体がなく、しかも全能である。現象世界の一条件であり、ひとつの運動であって、空間内の物体の存在とその運動に結びつけられ、混ざり合わされている。しかし運動がなければ、時間はないであろうか。時間がなければ、運動はないのであろうか。さあ尋ねられるがいい。時間は空間の機能のひとつであろうか。それとも逆であろうか。あるいは、ふたつは同じものだろうか。さあ問い続けたまえ。時間は活動し、動詞の性質をもっている。時間は「生みだす」のである。時間がいったい何を生みだすのか。時間は変化を生みだすのである。現在は当時でなく、ここはあそこでない。ふたつの間に運動があるからである。しかし時間測定の基準とされる運動は、循環して、完結するのだから、それはほとんど静止、休止と呼んでいいような運動であり、変化である。なぜなら当時は現在の中に、あそこがここに、たえず反復するからである。さらに、終りある時間とか局限された空間とかは、どう努めてみても考えられないことなので、業を煮やしたあげくに、時間と空間は永遠で無限であると「考えるように」決められてしまった。――その考え方が完璧とはいえないまでも、いくぶんましだというのにちがいない。しかし永遠なるものと無限なるものを定立することは、局限された存在、終りある存在をことごとく論理的、数学的に廃棄してしまい、相対的に零に還元することを意味しないだろうか。永遠のなかでの事の継起、無限のなかでの物の配列がありうるであろうか。永遠なるものと無限なるものを已むなく仮定しても、距離、運動、変化などという概念、それのみが、宇宙のなかの局限された物体の存在すらも、この仮定とどういうふうに調和できるであろうか。さあどんどん問い進めるがよろしい。

ハンス・カストルプは頭の中でこの種の問いを思いめぐらした。ここの上に到着するやたちまち、彼の頭はこうした慎みを欠く、不平がましい物思いを好む本性を現わし、始末の悪い烈しい欲望を満足させた後、とくにその傾向を強めて、厚かましく告訴するように

なったらしい。彼はそれについて自問し、善良なヨーアヒムに問い、はるか昔から深く雪に埋まっている谷に尋ねたが、そのどこからも答えらしいものは期待すべくもなかった。――どこから最も期待できないか、それはいいにくいのだが。自分自身にそういう問題を与えたのは、まさに彼がそれに対する解答を知らなかったからにほかならない。ヨーアヒムはというと、これはとてもそんな問題に関心を寄せそうもなかった。というのも、ヨーアヒムは、ハンス・カストルプがある晩フランス語でいったように、平地で兵隊になることのほか念頭になく、その希望が近づいてくるかと思えば、からかうように再びはるか彼方に姿を消してしまうので、次第に腹を立て、最近では、強行手段で希望との闘争にけりをつけようとする様子をみせていたのである。そうだ、善良で、辛抱強く、実直で、精勤と規律を持しているヨーアヒムが、反抗の発作に屈して、「ガフキー番号」に悪態をついたのである。ガフキー法は、普通「実験」と呼ばれている下の実験室で患者の保菌度を調べて、表示する、例の診断法であった。

つまり、分析された痰の中に、菌がごく分散的に存在するか、または無数に集団的に存在するか、それがガフキー番号の大小を決める。そしてまさにガフキー番号にこそすべてがかかっていたのである。というのもガフキー番号は、当該患者が予期すべき回復の見込みを確実に現わすのである。患者がまだ滞在しなければならない月数あるいは年数は、半年ほどの「短期逗留」にはじまって、「終身」の宣告にいたるまで、それとても時間的にはほんのわずかである場合が多かったが、ガフキー番号によって簡単に決定された。ヨーアヒムはそこでガフキー番号に反抗し、公然とその権威に不信を表明した。幹部連に直言するほど公然とではなかったが、いとこに向って、また食事の席でさえも公言するのであった。「もうたくさんだ。これ以上馬鹿にされるものか」と彼は大声でいって、濃く陽灼けした顔に血がのぼった。「二週間前ぼくはガフキー二番、ほんのすこし悪いだけで、見込み上々だった。それがきょうは九番だ。それこそ菌の巣窟で、平地の話などもってのほかなのだそうだ。どんな工合になっているのか、悪魔ででもなければわかるまい。もう我慢できない。上のシャツアルプにある男が寝ている、ギリシアのお百姓で、アルカーディエンから送り

こまれた男だ。代理業者の手でここへ送りこまれてきたのだ。――見込みのない症状、奔馬性だ。きょうかあすかという容態なのに、その男はこれまでただの一度も痰に菌がでていない。その反対に、ぼくがここへきたとき、元気になって退院していった、肥ったベルギーの大尉は、ガフキー十番だった。それこそ菌がうようよしていたんだが、それでいてごく小さな空洞がひとつしかなかった。ガフキーなんぞくそくらえだ、ぼくはけりをつける、家へ帰るよ、死んだっていい」そうヨーアヒムはいった。おとなしくて平静な青年がこんなに興奮するのを見て、みんながいたく当惑した。

すべてを投げうって平地に発っていくというヨーアヒムのおどしを聞いて、ハンス・カストルプは第三者からフランス語で聞いたある言葉を思いださずにはいられなかった。しかし彼は黙っていた。なぜならシュテール夫人がしたように、彼がいとこに向って、自分の忍耐強さを鑑にせよなどといましめることができるだろうか。事実シュテール夫人は、そんなに口ぎたなくいきり立つものではありません、おとなしくするのです、私の貞節をお手本になさいまし、私、カロリーネは貞節にもここの上で我慢して、カンシュタットのわが家で主婦として采配を振ることを、意志堅固に思いとどまっています、そのうちまたすっかり健康な妻をお返ししたいがためですよなどといって、ヨーアヒムに訓戒を垂れたのであった。いや、ハンス・カストルプにはどうしてもそんなまねができそうもなかった。まして彼は謝肉祭以来、ヨーアヒムに対してうしろめたい思いをしていたのである。――つまり、ふたりはそのことについて話し合わなかったけれども、ヨーアヒムがそれを知っていることは確かで、そこに背信、脱営行為、不実のごときものを感じ取っているにちがいない。ことにふたつのつぶらな褐色の眼、さしたる理由もない笑い癖、オレンジ香水の匂いを思ってみるがいい。ヨーアヒムは一日に五回、それらの効力に身を曝されながら、厳格に、端然と眼を伏せ、皿を見たまま相対しているのだから……そんなふうに彼の良心がささやくのであった。そうだ、「時間」に関する彼の思弁や見解に対して、ヨーアヒムが示したもの静かな抵抗にも、ハンス・カストルプは彼の良心に対する非難をひそめた、軍人らしい礼節をかぎつけるような気がしたのである。さて、彼がすばらしい寝椅子から、やはり彼の超感覚的な質問を向けた谷、深く雪に

閉された冬の谷はといえば、その尖頂、円頂、皺襞、褐色と緑色と淡紅色に染め分けられた森々は、時間の中にひっそりと立っていた。静かに流れいく地上の時間に包まれて、あるときは深い紺碧の空に照り映え、あるときは煙霧に覆われ、あるときは落日の光で上方が薄赤く燃えるかと思うと——あるときは妖しい月夜にダイヤモンドのように硬く冷たくきらめいた。——しかし六カ月、疾駆し去ったとはいえ、想像を絶するばかりに長いこの六カ月以来、谷はいつも雪の中にあった。療養客たちはみな、雪を見るのはもうたくさんだ、雪はうんざりさせる、雪を見たい気持は夏だけで十分満足させられてしまったのに、いまでは明けても暮れても積雪だ、雪の山、雪の褥、雪の斜面、度が過ぎて人間の我慢できることじゃない、精神も気持も殺されそうだといいあった。そしてひとびとは緑や黄や赤などの色眼鏡をかけたが、それは眼を守るためというよりは、むしろ心情を保護するためであった。

山や谷が雪に覆われてからもう六カ月になるだろうか。いや七カ月だ。私たちが物語っている間にも、時は歩み続けている。——この物語に費している私たちの時間もそうだが、あそこの上の雪の中にいるハンス・カストルプおよび彼と同じ運命にあるひとびとの、深く沈み去った時間も同じく進行していて、変化を生みだしていた。ハンス・カストルプは謝肉祭の日、「街」からの帰途、軽はずみな予言で、ゼテムブリーニ氏の怒りをかったが、万事がその予言を実現しそうであった。夏至が目前に迫っているというわけでないが、復活祭はもう白い谷を通り過ぎ、四月は歩みを進めて、聖霊降臨祭をのぞみ見るころとなっていた。やがて春になり、雪解けがはじまるだろう。——しかし雪はすっかり消えてしまうわけでない。夏を通じて降る雪は積りはしないから、論外だが、南の山頂や、北のレティコン連山の峡谷にはいつまでも雪が残っていることだろう。それにしても、一年の転換期が、近く決定的な変革を約束していることは確かであった。というのは、ハンス・カストルプがショーシャ夫人から鉛筆を借りて、あとでそれをまた彼女に返し、代りに別のもの、つまり彼がいまポケットに持っている記念の品を所望してもらい受けた、あの謝肉祭の夜から、すでに六週間が経っていたからである。——六週間といえば、ハンス・カストルプが最初ここの上に滞在するつもりにしていた期間のちょうど二倍

である。ハンス・カストルプがクラウディア・ショーシャと知合いになり、勤勉なヨーアヒムが部屋にひきあげてからずっと遅れて自分の部屋に帰ったあの夜以来、実に六週間たったのである。その翌日にはショーシャ夫人の出発、コーカサス山脈のかなた、はるか東方のダーゲスタンに向う一時的な旅立ちとなったが、あれから六週間である。この出発はしばらくのもの、一時的な旅立ちにすぎない、ショーシャ夫人は帰ってくるつもりである——何日とは定めがたいがいずれは戻ってくるつもりだし、またそうせざるをえないということを、ハンス・カストルプは直接本人の口から保証してもらっていた。この約束は前に伝えたフランス語の対話の中でなされたのではなく、私たちが時間と結びついた私たちの物語の流れを中断させ、ただあの純粋な時間のみを流れるにまかせた、私たちにとっては無言の間に与えられたものである。ともかく青年は、三十四号室に帰る前に、そういう約束と慰めの言葉を貰っていた。翌日彼はショーシャ夫人ともはやひと言もまじえず、遠くから二度見ただけで、ほとんど彼女の姿を見かけなかった。一度は昼食のとき、彼女が青い毛織のスカートに白い毛糸のスウェーターを着て、ガラス戸を音高くあけたてして、愛らしい忍び足でもう一度食卓の方へ歩いていったときで、彼は心臓の鼓動が喉もとまでとどきそうで、エンゲルハルト嬢が鋭く注視していなかったら、両手で顔を覆ってしまったであろう。——次ぎは午後三時、彼女が出発するときで、彼はその場にでかけなかったが、車寄せが見える廊下の窓から旅立ちを眺めていたのである。

出発は、ハンス・カストルプがここの上に滞在している間に、いくども見た場面をくりひろげた。橇か馬車が玄関に通じる車道にとまっていて、馭者と小使がトランクをくくりつける。サナトリウムの客たち、全快してかしないでか、生きるためにかあるいは死ぬためにか、平地へ帰ろうと旅立つ者の友人たち、さらにこの事件から刺戟を受けんがために療養勤務をさぼってでてきた弥次馬たちが玄関前に集っていた。フロックコートを着た管理所の紳士、それのみか、医師らしいひとびとも姿を見せる。それから出発する当人が現われるのであった。——たいていは顔を輝かせ、物見高い観衆と残留者に鄭重な挨拶をし、この冒険のため、このときばかりは見るからに心をはずませて……ところでこんどの場合、立ち現われたのはショーシャ夫人

であった。微笑を浮べて、腕一杯の花を抱え、毛皮の縁取りをした粗い地の長い旅行マントに大きな帽子といういでたちで、彼女と少し同道する扁平胸の同国人ブリギン氏に伴われていた。彼女も出発する者の例に洩れず、うきうきと興奮している様子だった。——医者の許可を得て旅行するにせよ、ただもうやけになって旅立つにせよ、危険を賭し、やましさを感じながら滞在を打ち切ったにせよ、それらの事情にはまったくおかまいなく、ただ生活の変化だけで出発者は喜び勇みたつのであった。ショーシャ夫人の頬は紅潮し、膝を毛皮の膝掛でくるんでもらう間も、たぶんロシア語でひっきりなしにしゃべり続けていた。……ショーシャ夫人の同国人と食卓仲間のみならず、他の客も多勢立ち会っていた。ドクトル・クロコフスキーは精力的な微笑をたたえて、ひげの中から黄色い歯をのぞかせていた。さらに花が贈呈された。大叔母さんはお菓子を、彼女のいわゆる「小菓子」すなわちロシアのマーマレードを贈った。女教師もそこに立っていた。マンハイム人はといえば——彼は少し離れたところで、憂鬱そうにうかがい見ていたが、やがてその憂わしげな眼が建物伝いに上ってきて、廊下の窓辺にハンス・カストルプを認めると、陰気に彼をみつめたままになった。……ベーレンス顧問官は姿を見せなかった。きっと彼は出発する婦人と、別の睦じい場でお別れをすませていたのであろう……それから取り巻くひとびとが手を振ったり呼びかけたりする中を、馬が橇をひきはじめた。橇が前進してショーシャ夫人の上体はうしろのクッションに倒れかかったが、彼女の流し目は微笑をこめてもう一度「ベルクホーフ」の建物の前面をかすめ、一秒の何分の一かの間ハンス・カストルプの顔の上にとどまった。……残された青年は色あおざめ、大急ぎで自室に取って返して、鈴を鳴らしながら車寄せに続く道路を「村」に向って滑り下りる橇をそこからもう一度見やったが、それから寝椅子に身を投じて、胸ポケットから記念に贈られた品、担保品を取りだした。こんどは赤褐色の木の削り屑などでなく、細枠にはめこまれた一枚の小板、光にすかしてみなければ何も認められない一枚のガラス板であった。——クラウディアの内面写真で、顔は写っていないが、上半身の華奢な骨骼が、肉の柔らかな形に明るくおぼろに包まれて、胸腔内の諸器官とともに認められた……

その後、彼はいくどこれを眺め、唇に押し当てた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ことか。時間は依然として変化を生みつつ流れていった。たとえばクラウディア・ショーシャと空間的に遠く離れたここの上の生活に慣れるのも時間のなせるわざであった。それも想像以上に早く慣れた。この地の時間は慣れを生みだすのに特別適した性質を持っているのみならず、その目的のために組織されていた。ただし、それは、慣れないことに慣れるという意味においてであるが。五回の大袈裟な食事がはじまるときのあのがたん、ぴしゃんは、もはや心待ちすべくもなく、もう聞かれなかった。どこかほかの恐ろしく遠いところで、ショーシャ夫人はいまドアを派手に締めているのであろう――これは時間が空間の中の諸物体と結びつき混ざりあっているのにも似て、彼女の存在、彼女の病気に結びつき混ざりあった心性の表出、要するに彼女の病気であり、それ以上のものではないのであろう……しかし彼女は目に見えず不在である、とはいえ、ハンス・カストルプの感覚にとって、彼女は見えないままに現存していたのである。――彼女はこの地の守護神、放埒甘美な悪しきとき、平地ののどかな小唄などが適すべくもないときに、彼が知って所有した守護神だった。そして彼はこの守護神の体内の影像を九カ月このかた多忙をきわめている心臓の上に、抱いているのであった。

あのとき、彼のおののく唇は異国の言葉と自国語で、放埒きわまりないさまざまなことを半ば無意識に、半ば息絶えて、乱れ語ったものだった。いろいろな提案、申し出、狂気じみた計画と企図、それらはみな当然のことながら、彼女の同意を得られなかった。――たとえば、守護神にコーカサス山脈のかなたまで同伴したいとか、あとを追って旅にでて、彼女が居住移転の自由に従って、気の向くままに次ぎの居所に選ぶ場所で待ちもうけ、それからはもう二度と別れまいとか、そのほかにも何かと無責任な話をもちかけた。単純な青年があの底知れぬ冒険の夜から持ち帰ったものは、まさしく例の影像の担保であり、彼女に自由を与えてくれる病気の定めるがままに、早晩ここへ四度目の滞在をしに帰ってくるだろうという、かなり実現されそうな可能性だけであった。しかしその時期が遅かれ早かれ、――ハンス・カストルプは、別れに際してふたたびこういわれた。彼はそのときには間違いなく「とっくに遠くへいってしまって」いるだろうと。この予言の侮蔑的な意味は、ある種のことは実現を願って

予言されるのではなく、そうならないようにという、いわば魔除けの意味で予言されるのだということを考ええなかったならば、いっそう忍び難いものだったであろう。この種の予言者は、未来がどんな情勢になるかを告げ、実際その通りになるのを未来が恥じるように仕向けることによって、未来を嘲弄するのである。守護神は前に述べた会話の中でも、それ以外のときでも、ハンス・カストルプを、「小さな浸潤個所を持つ愛すべき市民」(joh bourgeois an petit endroit humide)と呼んだ。これは「人生の厄介息子」というゼテムブリーニの言い草を翻訳したようなものであったが、問題はこの混淆した特性のどの成分がより強く、発現するかということだった。市民(bourgeois)か、それとも他方か……それに守護神は、彼女自身なんどか出発してはまた舞い戻ってきたこと、したがってハンス・カストルプとても、しかるべきときにまた帰ってくるだろうということを、考慮に入れていないのだった。——もっとも彼がここの上に相変らず腰を据えているのは、そもそも二度とここへ戻らなくてすむようにと思ってのことで、他に多くの意義があったとしても、これこそ、彼の滞在の厳然たる意義であった。

謝肉祭の夜のあざけりの予言がひとつ的中した。ハンス・カストルプの体温曲線ははかばかしくなかった。曲線はギザギザした線で急角度に上昇し、彼はそれを一種晴れがましい気持で記録したが、その後二、三度下降してからは、高原状に走り続け、わずかに起伏の波を見せはしたものの、ひき続き従来の平常位より高い線にとどまっていた。顧問官の意見では、この体温は、高さといい、頑固さといい、患部の症状とどうにも辻褄があわない高熱である。「見かけによらず毒されていらっしゃいますな、あなたは」と彼はいった。「どうです、ひとつ注射をためしてみましょう。効果があるでしょう。こう申す私の予想どおりになりましたら、あなたは三、四カ月もすれば、魚が水をえたごとくにおなりでしょう」そんなわけでハンス・カストルプは週に二度、水曜日と木曜日、朝の運動の直後に、下の「実験」に出向いて注射を受けることになった。

ふたりの医師が、その薬を注射してくれた。ときに応じてどちらかがするのだが、顧問官の方が老練だった。針を刺すと同時に、たちまち注射をすませてしまうのである。もっとも、彼はどこに刺そうと無頓着だった

ので、ときどき飛びあがらんばかりの痛みで、しばらく燃えるようなしこりが残るのだった。それに注射は有機体全体を激しく疲れさせ、スポーツか何かで猛運動したときのように、神経組織を震盪させた。これこそ注射にひそむ効力を証明するもので、効力は注射の直後しばらく体温が上昇することでも明らかだった。これは顧問官が予言していたところで、実際きまってそうなるので、予言された現象には異議をとなえる余地もなかった。順番がきさえすれば注射はすぐすんだ。掌を返す間に大腿部であれ腕であれその皮下に解毒剤が入っているのであった。しかし二、三度、顧問官がたばこのせいでふさぎこんでいる様子もなく、たまたまロをきく気分になっていて、注射の折に少し話し合うということがあった。するとハンス・カストルプはたとえばこんなふうに水を向けることを心得ていた。

「いつかお宅でコーヒーをいただいた愉快なときのことを、ぼくはいまでも心楽しく思いだします。顧問官さん、去年、秋でしたが、たまたまそういうことになったのでしたね。ついきのうも、それともっと前になりますか、いいとこにそのときの話を持ちだしましたよ……」

「ガフキー七番」と顧問官はいった。「最近の結果です。あの青年はどうしても毒が消えようとしない。だのに彼は、ここを去って、サーベルを下げるんだといって、私をこづいたり悩ましたり、最近はいままでにないほどひどいんです。まるでやんちゃ坊主だ。三カ月の五倍くらいいたからといって、まるで永遠を過したとでもいわんばかりに喚きたてるんだから。何がなんでもでるという――あなたにもそういっているのですか。ひとつあなたからよくいいきかせてください、あなた自身の意見として、それも強くいってください。そこの地図の右上の地で早まって情趣あふれる霧を吸ったりしようものなら、あの先生は雲散霧消ですよ。ああいう大言壮語の徒に大して脳味噌はいりますまい。だがあなたはもっと分別もあり、文化人で、市民的教養人であられる。あなたは先生がばかげたことを仕でかさないうちに、頭を冷してやるべきです」

「そうします、顧問官さん」ハンス・カストルプは話の誘導を諦めないままにそう答えた。「彼がそんなに楯突くのでしたら、なんどでも頭を冷してやります。それに彼はききわけるだろうと思いますよ。それにしても眼に触れる例が、必ずしもいいものではありませ

んからね。あれが有害なんですよ。ひっきりなしに退院していく――勝手気儘に、本当の資格がないのに、平地に向って発っていく。しかもまるで正規の退院でもあるかのように、あのお祭り騒ぎです。性格の弱いものは誘惑されますよ。たとえば最近も……最近に出発したのはだれでしたっけ、ご婦人ですよ、上流ロシア人席の、そうだ、ショーシャ夫人です。ダーゲスタンへとかいう話ですね。それで、ダーゲスタンというのは、ぼくはそこの気候は知りませんが、とにかく上方の水際よりはましなのでしょう。でもぼくたちから見れば、そこはやはり平地です、地理的には山地なのでしょうが。ぼくは地理にはあまりくわしくないんです。でもそんなところで、全快していない身で、いったいどんな生活をするつもりなのでしょう。根本概念を欠き、ここの上のぼくたちの規律を心得た者もいず、横臥や検温の仕方も知られていない土地で。それに彼女はまた帰ってくるというじゃありませんか、何かの折にぼくにそういいましたよ、――いったいなんのはずみで彼女の話などになったのでしょう。――そうそう、あのときぼくたちは庭であなたにお会いしたのですね、顧問官さん、覚えておいでしょうか。つまりあなたがぼくたちに出会われたのですよ。なぜって、ぼくたちはベンチに腰かけていたんですから。どのベンチだったか、いまでも覚えています。ぼくたちが腰かけて、たばこを吸っていたベンチを、ぼくはあなたに正確にお教えすることもできるでしょう。つまりぼくがたばこを吸っていたのです。いどこはなぜかたばこを吸いませんから。あなたもちょうどたばこを吸っておられた。そしていま思いだしましたが、ぼくたちはおたがいに自分のたばこをすすめ合ったのですね。――あなたのブラジル葉巻はすばらしい味でしたが、あれは若い馬を相手にするつもりでおつきあいすべきものだと思いますよ。でないと、あなたがいつか、二本のささやかな輸入葉巻をおふかしになった後、胸を波うたせて踊りながらご退場ということになりかけたように、変な仕儀になりかねない。――まあ無事にすみましたから、笑っていられるのですが。ところでぼくは最近またマリア・マンツィーニを二、三百本ブレーメンから取り寄せました。ぼくはこの製品に首ったけなんですよ。あらゆる点で気に入っています。ただ関税と送料とで高くつくのが少々こたえます。で、もしこんどの診察でまた相当期間追加されるようなことに

なれば、顧問官さん、ぼくも遂に当地の葉巻に転向する覚悟です。——飾窓になかなか立派なのがみえますからね。さてそれからぼくたちはあなたの絵を見せていただいたんですね、まだきのうのことのように覚えています。実に楽しく拝見したものです。——あなたが油絵具で冒険をなさるので、ぼくはまったく度胆を抜かれましたよ、ぼくなどとてもあの勇気はありません。ぼくたちはショーシャ夫人の肖像も拝見しましたが、皮膚の描き方は第一流で——ぼくは感激したといっていいでしょう。あのころ、ぼくはまだそのモデルを知りませんでした、容姿と名前だけしか。その後、彼女がこんど出発する直前に、ぼくは彼女を個人的にも知るようになったのです」

「何をおっしゃることか」と顧問官は答えた。——以前にさかのぼることが許されるなら、ハンス・カストルプがはじめて診察を受ける前に、熱も少しあると告げたとき、顧問官はこれと同じ返事をしたものである。顧問官はそれ以上何もいわなかった。

「いや、そうなんです、本当なんです」とハンス・カストルプは力説した。「経験上からいって、ここの上で知り合うことは、決して容易じゃありません、しかしショーシャ夫人とぼくとの場合、最後のときに及んでそういう運びになったのです。話し合うことによって、ぼくたちは……」ハンス・カストルプは、歯を喰いしばって、息を吸いこんだ。注射針が刺されたのである。「ふう」と彼は顔をそむけた。「偶然に刺されたところが、きっと非常に大事な神経だったのでしょうね、顧問官さん。ええ、ええ、まったくもって地獄の責苦です。ありがとうございます、すこしマッサージしていただけばよくなりましょう。……話しあうことによってぼくたちは近付きになったのです」

「そう。——で？」と顧問官はいった。彼はうなずきながらたずねたが、そういう彼の表情は、相手の賞め言葉を予期していて、問いそのものに、予期される賞賛への、自分の経験にもとづく承認をふくませるひとのそれだった。

「ぼくのフランス語は多少しどろもどろだったかと思います」とハンス・カストルプは体をかわした。「流暢にしゃべれるわけがないでしょう。でもいざとなると、いろいろ思い付くものです。そんなわけで、どうにか意を通じ合うことはできました」

「そうでしょうとも。それで？」と顧問官はくり返し

催促した。彼は自分からつけ加えた。「悪くなかったでしょう、ええ？」

ハンス・カストルプはYシャツのカラーをはめながら、脚をふんばり、肘を張り、顔を天井に向けて立っていた。

「結局とくに変ったことじゃありません」と彼はいった。「ある療養地でふたりの人間が、あるいはふたつの家族が、何週間も同じ屋根の下で距離をおいて暮している。ある日彼らが近付きになる、お互いに率直な好感を持つ、と同時に片方がいましも出発しようとしていることがわかる。こういう残念な経験はよくあることだと思います。そこで、生きている間、少くとも接触を絶やさないで、お互いの消息を知りたいと思う、つまり手紙でです。ところが、ショーシャ夫人は……」

「そう、彼女はそれを望まないのでしょう」顧問官は楽しげに笑った。

「そうなんです。彼女はてんで相手にしませんでした。彼女はあなたにも、ときどきの便りはよこさないんですか、彼女の滞在する先きざきから」

「とんでもないことだ」とベーレンスは答えた。「そんなことを、あれは思ってもみないでしょう。第一不精だし、それにまた、いったいどんなふうに書けばいいんです。ロシア語を私は読めません、——必要に迫られれば、まあなんとかでたらめでもしゃべりますよ。でも読むとなるとただの一語もだめです。あなただってそうでしょう。それにねえ、あの小猫はフランス語、さらには新高ドイツ語までも、いかにも可憐にニャオニャオやりますが、書くとなると、——それこそ周章狼狽でしょう。正書法というものが、あなた。そうなんです、お互いに慰め合うほかありませんよ、君。彼女はいつも舞い戻ってくる、いったりきたりです。いわゆるテクニックの問題、気質の問題です。ある者はときどき出発して、その都度舞い戻ってこなければならない。しかるにある者は、二度と帰ってこないですむように、はじめからゆっくり滞在する、というわけです。あなたのいとこさんが、いま出発なさるとすると、あなたから彼にこういっていただきたい、あなたがまだここにいられるうちに、またもや彼は敵かに入城してくる。たぶんそういうことになるでしょう」

「しかし顧問官さん、あなたのお考えでは、ぼくはど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton